

## 朝鮮半島大同累層群の古地磁気

## Paleomagnetism of the Daedong Supergroup, Korean Peninsula

# 宇野 康司[1], Ki-Hong Chang, [2]

# Koji Uno[1], Ki-Hong Chang[2]

[1] 神大・自然・環境科学, [2] 慶北大・地質学科

[1] Division of Environmental Science, Kobe Univ., [2] Department of Geology, Kyungpook National Univ.

朝鮮半島中央部に分布する大同累層群が38サイトにおいて古地磁気学的研究用に採取され、特徴的残留磁化成分が4サイトから得られた。この特徴的残留磁化成分から大同累層群を代表する古地磁気極を計算した。この極は同時代の北中国および南中国地塊から求められた極に対して同じ古緯度を持つ。このことから北・南中国地塊の東部である朝鮮半島では、後期三畳紀までには南中国地塊の北上による衝突がほぼ完了しており、その後回転運動のみを経験したと考えられる。大同累層群の極が南中国地塊の極に対して近いことから、大同累層群は形成した後に南中国地塊とほぼ同じ回転両で運動したと考えられる。

朝鮮半島中央部に分布する前期中生代湖成堆積物である大同累層群が38サイトにおいて古地磁気学的研究用に採取された。段階熱消磁の結果、635~660°Cのアンプロッキング温度を持つ特徴的残留磁化成分が4サイトから得られた。その他のサイトからは、現在の地球磁場に平行な単一磁化成分もしくは不安定な磁化成分のみが得られた。特徴的残留磁気成分は正常磁および逆帯磁の両極性を持ち、95%の信頼度において褶曲テストおよび逆転テストに通過した。これより特徴的残留磁化成分は後期三畳紀の初成磁化成分であることが結論された。その平均方向は $D=82.2^\circ$ 、 $I=23.1^\circ$ 、 $a95=4.1^\circ$ である。この古地磁気方向とこれまでに発表された初成磁化方向を合わせ、大同累層群を代表する古地磁気極を計算した： $31.9^\circ N$ 、 $220.2^\circ E$ 、 $A95=12.7^\circ$ 。この極は同時代の北中国および南中国地塊から求められた極に対して同じ古緯度を持つ。これら3つの極は朝鮮半島に中心を置いた小円上に並べられる。このことから北中国地塊と南中国地塊との衝突現象は、後期三畳紀以降では両地塊の回転運動で本質的に説明されることを示す。北・南中国地塊の東部である朝鮮半島では、後期三畳紀までには南中国地塊の北上による衝突がほぼ完了しており、その後回転運動のみを経験したと考えられる。大同累層群の古地磁気極が南中国地塊の極に対して近いことから、大同累層群は現在の朝鮮半島において形成した後に南中国地塊とほぼ同じ回転両、回転センスで運動したと考えられる。